六神丸製法

7-18
204
1

小栗外傳

絳山翁戲編

北辰政画

北邨芳

旅 204

僕ら家に傳へる翁は忠信なる人にして人の子を教ゆるに
右き物語をもとに活潑なる僕も幼稚
なるまゝ一日小栗助重とを拾ひ
たるを其事いと情ふかくまことに書
きなるを友古てもよく板行なれきゝを
今年書肆愛星閣のいとゝ頃く梓に彫んとす僕
の弟小栗実紀てふ書ありしを山書房義
せられさ人と導んとめにとなほどとまゝ鄙び拙ゆ云り

語とてもかの書はけ博識いとしかるべきを
り隣翁の鬼知なとあつく僕と責任の辞あるむや
書肆ら笑ひて秋園唐園の古き事をうそぶくも
ごの名きとこのまこと見たもへ様ど元とむきよりて多くハ
ひがごとなれと賢き人も宜へ是ほう最多はうるくよ耳
ちうく仏之平と古唐園の賢き代よハ囲碁の風俗さ事
わるとと志ゝ〜之〜〜沒乃ことけに書ゝんと稗官よ
余て小説ごとくに巳ゝる人へ是今け書も彼小説よ亜他き

もれと世ハ世ハ世教乃名をけ乃きよ〜をあ〜す
漢翁の鬼こ法と知ゝハ長ゝぶと名あるとを
いくて恨とまゝら世と巳ゝ巳ゝ巳ゝ巳ゝ巳ゝ辞む面ゝ
ゆ乃名をけ乃よ書肆ら妙ゝ巳ゝ乃ゝ

文化十癸酉正月

鋒山人 歙醐 [illegible]

美濃小太郎為久
後藤兵助 恥高

美濃管代助重
田邊平八郎長為
田邊平六郎 長秀
順天姫

風間二郎正貞
風間八郎正国
庁間加太郎春教

池辺司助長
後藤大八郎高次
庁國加次郎春高

栗外傳前編目録

○巻之一

第一編　燈下鬼と談じて地所を看る

第二編　兩中怪を探しく老翁に遭て

第三編　西士堂と毀く神霊を走らと

第四編　二家仏に因て奇児と産く

○巻之二

第一編　鵤鳩と射く小年婚を約す

第二編　鮎魚を紹して勇士命と落を

第三編　横山俊計と一色に謀る

第四編　結城実事を家板に訟ふ

○巻之三

第五編　藤代川に小栗良猟と得る

第六編　桀波山に風間明主に遭く

第七編　孝子耕田く孝義と表を

第八編　勇士山猟して邪悪を除く

○巻之四

第一編　三傑山猟く両害を退す

第二編　妻婦譏毀して孝子と逐ふ

第三編　西雄市に得く因縁全く

第四編　一老城に死して俊邪誇れ

○巻之五

第九編　貞婦夫婿と待て節と全き
良馬名士に遭ふて能を顯す

○巻之六

第十編　舜妓哥と唄ふて蜜計と諭す
老僧因を説て未前を示す

第十一編　妬嫗欲と遑ふて二娘と宿す
義婦身を殺して女主を救ふ

以上十一編前編六巻

善戲謔為虐兮不

絳山先生編述寒燈夜話十五巻書肆分為三帙至此編乞序辭於我我熟思先生之戲編主勸懲故以淇奥詩言換序辭而已

文化甲戌孟春　米花散人鬣堂題

白糸姫

結城持朝

老獲

常阿上人
横山安秀

一色詮秀
賊婦

書肆衆星閣子草廬より来る。曰く、峰山先生所著の寒燈夜話、初編二編、既に
發兒〻世に行はる。茅三編刻既に成ぬ。二編中に長兄初編の要を摘て出し、
讀者の助とす。今此三編と二編の要と抜抄して、其需道理あらば
再び拙筆を走らすと左の如し。

照天姫。瀬戸橋にて身を投げ、ひは折から人買小四郎が舟ふさんに拾入水せざれど、
既に氣絶して、小四郎と是名武の臣なるが、姫を見知りて救保して蘇生し
其身の上を問ふに、姫の藤浪が毒惡に懲て、宴事を述べど、其時しも小夜ふ
ふ人買来る。姫を買りて去ぬ。其跡へ小夜来姫乃去向を問ふ。此時小四郎
姫の主君なるを知、先非を悔、小夜に よく〻自殺せり。小夜
兄に遺金とにぎ、身價の金を首にかけ、六部となりて、姫の去向を尋ねさて照天へ小
夜が實父ひとり、美濃国青墓の宿方長が女房女と成て、

とかり。辛苦とすうちに、不忠夫助重、方長が許に来りて夜賊の為に其身を失ひ
途ふ〻く美登小太郎に救はれ、三州二村山に忍びまりぬ。小栗助重、前に二村山に忍びまり
し。美濃の金生山虚空蔵より、方長が女児花兒悪漢ふせぐ〻に難儀なるを
救ひ、花兒に懸恋せり。二村山に遷るとて、方長がりに居しせて、方長照天姫二
人を居るを知、其家長万平と、家人とす。其當時美登小太郎と、はりあひて兄遺金と
雖乃身を贖ひ度し。其后照天小太郎の三人に美濃に忍びし。小栗も、彼知て彼の姫
許に来る。花兒其跡を慕ひ来て、姫と争時、万平忍び来て、彼是、万平終に小太郎が為に
殺さるゝ。花兒ますく〻妬く〻恋死せり。其後小栗東国に下りとく。箱根まで来りて。
花兒が怨霊のため、熱湯の裡に落つ。乗馬鬼駲を殺。其身も湯傷して、支體に傷まで残
記せり。是渾、勧懲と主やする物語なり。

小栗外傳三編目次

壹卷
第十八編　鬼に祟れる助重悪瘡を発き　讐ふ逐れる照姫股肱を失ふ

同上　第十九編　千里ふ車を牽て仇助を祈る　一朝に病愈て神徳を仰ぐ

貳卷
第二十編　山鬼の魔術女児を誘ふ　老僞の念珠怪獣を走る

同上　第廿一編　九傑遠慮良将を助く　三嚢奇計妖攫を伏す

三卷
第廿二編　宿を破寺に投じて山賊を殺す　途を草廬に索て両婦を得る

同上　第廿三編　壮夫郊示ふ草賊を討　孝婦白屋ふ美男に会ふ

四卷
第廿四編　勇威龍を走して亡鏡を復す　仁恵士を憐て旧宝を見る

同上　第廿五編　怨家を討て孝義を表す　痴老慙愧して仏門ふ入る

五卷
第廿六編　佛堂を再建して因縁全し

通計九回

寒燈夜話　小栗外傳　巻之一

東都　絳山獸醜陳人　戲編

第一編

燈下鬼を談して地雁を省る
雨中怪を探して老翁ふ遭ふ

豆利昌氏公。元弘の功ふよりて。漸くに昇進し。従二位の参議ふ補任し。征夷大將軍の宣旨を蒙り。関八州を管領し。相州鎌倉ふ居をトする。平石一族。新田と我身と確執のことありしふ。夫れより。南北と朝ふ別れ天下二ツと為る。軍文ふ止付ては。こゝに北条氏公ハ。嫡男義詮公と共に。北朝の帝を守護のゝ。上洛あり。四二男基氏公ハ。鎌倉ふ止て。関東と為ることゝ。基氏公性質賢戈まゝ。武と内とハ。礼を外ふ行ひ。文ふ行ふ。東国の侍其徳ふ伏し。関東諱溢ふ治りる。されば。基氏公の御後代。鎌倉の主

とハなり給ふ。基氏公より三代ハ。左兵衛佐満兼公とかゝ。此公十八才にして
箕裘と嗣ぎ給ひ。父祖の徳と犯奉家枝一家の忠ふかゝ。其職を保ド
給ひ。満兼公ハ。ご年卯月ハ。平生ものたゝれ。我のこ多くりこゝふ
一色式部少輔詮秀といふ人のあり。これハ足利累世の臣なり。近習の頭人
ふ。ものしり。此詮秀が為人奸佞邪智にして。飽すで貪欲ふく。賢と好こ愚と
謗り。不仁不義の行のこゝろ。されど近臣の臣人なりて。其威と懼且ものの
非と咎ムるものも。小人のゝ。詮秀ものれが持威ふ。我も足利家
譜代の臣なり。家枝の人ふ及ばず。初て居るといと安念の幸こ。あゝ是
孰ものゝ。只願満兼公ハ媚阿折ふ。家枝と初ものゝ
増る人こを。君臣の間を疎ふ。今年應永六
年なりしが。夏の頃より。鎌倉中夜く光物飛行ること。口頃なる。ひか

素秋の上旬ハ。こゝちもぐきさる霖雨ふ。鎌倉大義が谷の住所
ふ。夏頃満兼公ハ。徒然ふ堪ずして。近臣の輩と揚弓なんぞ。
ハ戯ふ。白益ハ。はぎれる人ども。夜のなぐさめ。いとゝ侘しくもぞ
なり。一夜一色詮秀。當直なりしが。君の御光景を着。彩る射ふ。怪を
昔物語にハ伽ものゝ。そらことまでなれ。ものゝ
悲しげふ物語りふ。おもゝ夜ハ更ふり。此時ハ座の上ふさく物音して
ハ縁の障子明らかゝ。ものゝ。怒ち晴くなりて。ものゝ音もなし。君
こゝ。ものゝ人ゝ怪しめば。詮秀ほとりゝ。ものゝ怪異と
知りなるこゝや。これハ近日人の風声なる。先物也。七説音が谷と。佐
女が谷の間より出ること。もゝれども。さゝ。ものゝ
実否こと。ものゝ極なりのあゝ。天晴剛者ものゝ。人ゝ。ものゝ

なるものハ。詮秀がかくりがほするを悪と聴されしものハ先刻よりの怪談が
けなき人に只今目前光物を見たりしが。心おくれて志りごみし。彼ありて詮秀
が詞を回意ものにし。詮秀己が云かけたることの回意ものなるを。志かけ
たりて面目を失ひしかば。満兼公に對ひて申けるハ。先祖頼光公乃
時附一族の伽に羅生門に鬼住よしを申者ありしかバ。渡辺の綱に命せし。
鬼神を討しめたまひき。されバ今の世の童子までも。その勲功の事をかたらざり
侍人で賞しひ君ハ正しく。その御子孫にてましませバ。猶関八州
に奥羽までを管領したまへバ。頼光公よりハ位も富も遥に勝りたまひし
るが。ふつつかなる妖物をえたぐくびれたは人なきハ。いかに澆世なりとぞ
好まで武勇ハ劣たまひしと淺猿しく思ふと。心のうちたゞきにかゝなり。
清和公年の満兼公の御氣色を変じ海が中処至極せり。我不肖なりといへ

ども。箕裘の業を嗣いで。関東の管領たり。其在住せる鎌倉に妖怪
あるを武威なきに似たり。斯てハ八州を制するに任へ。誰かある急いで
佐々女が谷に走向ひ。妖怪の実否を見届まゐらせよと宣ふを。御伺ひ下より。
某今の仰に叶ふやと思ふものあり。諸人誰なるらんと見るに。総角さる
美童少年。御座の側より立出たり。是ハ下野國結城の城主七郎左衛門
氏朝が嫡子。六郎持朝といふ者なり。満兼公かぎりなく喜び。汝おくも
年若けれものなるが。さらバとく彼所に至れよと命ぜらるゝに。持朝仰せを
さりながら佐々女が谷に参りても。もし妖怪にあはずとも空しく帰り
なんにハ後日彼是と人のいはんも。無念に候へば何れ物賜りて。彼所に止
置れ候の験なりもせじと云ぞ。実道理に候へばこれなん證に
せよとて持まふ処の扇を賜ひければ持朝喜び。小臣古の綱に似はぶるべく

あふ縁どゝ此に扇こそ古の今れゝそゝぐるゝと。勇とるゝして此所を退出。日頃飼馴し馬ゐうち系。借をも連ぞ只一人佐〻女ゞ谷へと急ぐる。頃ハ季ゐ秋、初旬なるゝゐ。夜も更闌〻となれば。天ゐ月の光なく。雨さへいとゝふり出く。咫尺も弁ね黒夜と。松明を照して路辺の草踏こきんたどり行き。駒乃手綱とかひくれば。寒虫さへ音をかゝし。淋尾花とゐ〻こけん。幸ふして御ゐ佐〻女ゞ谷ゐ到れば。馬より下て四方と徘徊どゝれぞともあぞ〻ひの跡ゝ見ざりしかば。根色ゝとを云ゝゐこそ。さるゐそも紛し扇紙ぞ。何方ゐ止めゝ歩んゝと。四方と回顧をゐ。斬傾き拉ひみる堂あり。これなん社殿こさめれと。其堂ゐ入松明を照して見てあるゐ。圓通とゐふ額あり。こゐ祝ぎを安置とる堂ゐゝとと。安て羽を仏檀の系ゐ居。私首して祈るハ系君の命ゐゝり。此地ゐ妖怪とゝ面人為ゐ。ゐりけるゐ。些の怪異をゝぞと斯てゝ

君ゐ対へあぐき羽ゐ。此地方ゐ妖怪ありゝと。実事ゐあるゝ。移ゐ〻へ我ゝゝ見さしゐ人と。ゐばゝ〻念ゞ居られどゝゝゐ怪異色し。此地方ハ鎌倉の中ゐゝ〻も。任山法の邊地ゐて。古樹生茂て。鬼穴を穿ち。狐踏跡印ゐゐ外人跡絶るゐ。殊ゐ三更の比及ゐて。風雨樹をいたこのゝ。寂として物音ゐ。尋常のものなりせば。いとで此ゝへゐ入べき。持朝年ゐ冠をゐゐ至ゝ〻れと。天性の勇あれば少も恐懼せど。前刻より只一人観音堂ゐ行居て。只顧怪異ゐ遭ゝこを念じけるで。絶く物怪ゝ見ざれば。君ゐゐ申さゝそ。結ゝびゐゝん。いざ〻ゝゐ還らゞやと。軽おひ立ゐ馬牽ゐし。既ゐ乗らんとゝる時ゐ。忽然として八十ばゝゝと。おぼ〻しき翁の石ゐ黎の杖を携て。左ゐ水晶の数珠をゝ持ゝ。ゐ〻ゝ〻と。歌舞堂の前ゐ現られ出ゝゝり。扨朝これを看ゝゝり。さてゝそ妖物こさめれと。雀躍しゝ討ゝんと

結城持朝

神翁
佐しや谷持朝
神翁と豊し

とゝみとりしが。さて夜ごし此公羽り大頭あつて。詣ふあつる者ふもあらば不便のるなり。人々鬼ゝとゝろこゞやと。公羽ゞ側近く進と寄れば。公羽ゞ宗ふとして云へり。夕れは足下ハまゞ総角の才とりて。深夜ふあるゞ。此幽隠の地ふ。和とり拉しーけるゝことの勇ましちよ。そもいゝるゝ人ゆてゝらゝゞせゝふとゝのりまるふ。扨朝ハ彼とゝそ同んとゝそひきや。我身のゝと同ゞゝと。咲きゝるゞら。其ハ今夜君の命と稟て。此地方ふまゝりのも翁ふ遭ゝて幸なれ。近頃此地方ふ妖怪出るよし。其ハ必へあり。り知るゝめゞば語りゆゝと云へりければ。翁ゝゝちゝり。此霊塲ふあゝて。いゝて妖怪乃出ゞゞきや。足下ハ代記者の履歴と知ゝでおハさん。そもゝ此観世音ハ當初。後光嚴院の御時延文四年。新田左兵衛佐義貞。武州矢口の津ふ。おゝて。牛沢監物の為ふ討ゝ。其霊東國ふ祟り。多くれ怪異あり

けるゝふ。通食管領の談ふおゝて。夜毎深夜ふ及び。厨の内ふ人あり語り笑ふ。既ふして明燈を挑げ。餐を調人食と具く。飲食の音ゝ。番士の等怪ゝて。厨の戸を開き視るふ。さゝふ人氣ゝ。戸を閉ねれば又元のごとゝ人の声ゝ。これ窮惟録ふ載る嵐の怪なり。それのゝるふ。通食管領の寺社。故なして華表ゆゞゝ。堂倒るゝと少るゝゞ。或ハ白日空中ふ矢叫ひの音ゝ。黒夜街上ふ童謡の声あり。外さゝゞの怪異あり。人民安ゝ。至若るゝ。関東一圓ふ瘟疫さゝふ流行。死亡さるゝの多ゝ。ゝふ。基氏公これと患ひ。刑罰と釈ゞ。税賦と蔑ふて。大赦を行ひ。尚東國の宮観寺院ふ命せて。霊法秘法と修せゝれゝゝど。さらふ天災地夭止ざるゝ。其頃相州藤沢山清浄寺の住侶渡和上人と。ゝへ。ふ開山一遍上人より八世ふ

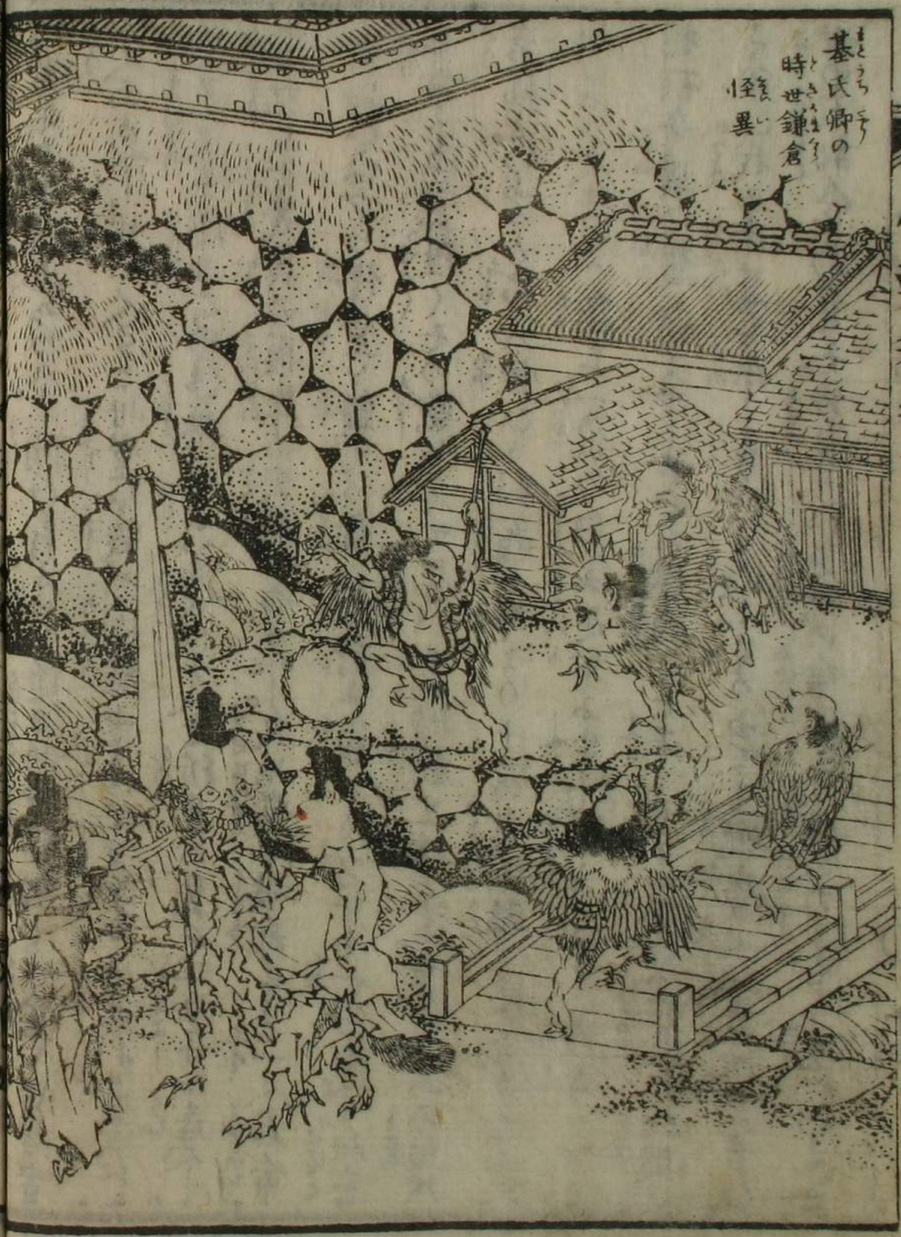
當りし拙行上人なりしが。道徳いと高ふとかりしが。基氏公扶くる家杖憲顕と議り。渡松上人を請ひ。天災を禳ぐき修法を乞ひ。上人民の嘆と。基氏公の民を憐む志厚の行を感じ。一七日の間秘法を修し。自ら十一面観音の像を彫刻し。足利義無と。十人の従臣と。十一の霊を結び為る。その像を此佐々女ヶ谷に安置せしかば。疫癘止滅会中の怪異もあらざりしかば。其後藤倉静謐に治り。今は爰領ふ至るまで。連綿として其職を安んぜり。足ひと人ふ。此十一面観音の冥助ふ。

よるものなるべし。然るに今年満兼公の家督あるて。世を新ふるぬ。されば天運も革ふにけれ。多くは邪氣動りて。此観音菩薩。其妖魔の氣を驅らんと。夜毎遊会中を。孔行しるる。爰に妖怪ものの形ふ。ひらぼとといとすべくもて物語るれば。拙行上人。此十一面観音と此地に安置

置るる縁故を知り。この翁凡人ふあらじとおもひしに。尚此後の世の光景を聞人と。礼を恭して云へりけれ。不図も翁の示るるふより。此観音菩薩のこゝに安置る縁故と霊験の著しを知るる。翁の此光景ふ見まゐらるふ。凡人とは思ひそべらじ。通力自在の神仙ならんかと。某ふ足利累代の臣なり。頑くに此後藤倉のなりゆきを吉凶いかゞ。ならん。此上の恵ふ。未来の事を示し給へと。慇懃ふ問ふれど。翁は双眼を閉ぢ一言も回答ふし。持胡尚辞と鄙ふして。再三乞ひ求めど。翁漸ふ眼を開き。舒ふ云。生々ふ。この事天機ふして。漏らさべからざるあらば。足下ふ忠信ぶ。ふ公の猶勝さふ。其大ひなと治りゆきさん。足下の今夜こゝに来るも。佞臣は君を勧ふ。ふ君を。君ふ。ふへあげるべし。ふ附必定彼佞臣。此観音堂を破却せんと。

勧めてさべし。君許容あつて十日ばかりこの此堂を毀ちなん。再び村人先年渡船上人の封じ込めし竜。新田義貞主従の霊再び世の間に出でん。然るときは旧しく仏縁に因られば。最期の悪念に失て世の累となるべきなれば。此人く元英雄の輩なれば。生を変ても。世に有るほどの豪傑となるべし。名を天下に現すべし。その夫れ止ぎられど。此観世音一回此地方を去るべし。鎌倉鷹濠の因縁絶て。これより東国大に乱るべし。これ天の命なれば。奈何ぞも除さべき。よしや佞臣どもら。君を勧めて。この堂を破却せざるとも。訳音此地方に来りて。命数尽やれば。いつそ人間の力とりて止んぬ。足世に漏さべきなれば。よく〳〵心に秘めて。人に語るべからざると念じ示し〳〵給へ。持明今夜此地方に来る縁故云あてつれ。深く感激し。尚委しく聞かんとは教示く。只今宜しく義興主従の霊に何度か生れ生れんと願ひ給へ。翁近日此堂を毀てる命を禀る者二人あるべし。其一人こそ此堂を毀つ因縁によりて其家に生れ出づべし。又今一人を近日この清佛に授けの人と祈るべし。女子を産べし。此女児こそ義興の再生と夫婦となるべし。又此堂を破却する二人君命とはいひながら仏堂を毀てる報ゆて。終に家も亡ぶべし。此言妄るべからねとぞ。往くその験を見て思ひ知べし。時刻も移るぬ。早く去の処去ぬと。翁の霊と見えしが。忽ち一朶の白雲足下に生じ。陣くとして去りけり。

村明奇異の想ひをなす。さてこの翁こそ正しく十一面観世音の化現なるべし。我に示すべきあらんとぞ。観音此地方に来りし。世の間乱れんとあるこそ。方見れば足天の命はしく。佛の力もて及ぶかとぞ。


基氏卿の
時世鎌倉
怪異

宜ひければ。今ハたとへ身ハいかなりとも詮秀ハ亡せたれバ君の御身の上ハ恙なく
あらまほしと再び観音を伏拝み。満兼公の御身安全のことを深く祈誓。
心裡さらに楽まずと。欝々として還りけるとぞ。

第二編
両士堂を毀て神霊を走らす
二家佛に因て奇児を産む

持朝ハ依てかの谷を出て彼所に還りける時しも。夜ハ五更近きころなりしとぞ。
満兼公ハ猶も斜ならず持朝を俟わびたる人々ハ。直に御前に出て事の趣を聞え上佐々女
が谷の光景。さてハいかにと宜へバ。持朝謹で翁に遭ける首尾を詳
らかに上る。去れども翁が人に漏しそと云ける事をば。まうさゞりけり。
これハ翁を恐れて秘るにハあらねど。満兼公のかしこくも笑せ給ひ。是ハ何
なる不思議のことぞと。俄しく思ひを為て東国の乱るべきを遠慮ありし

その故なり。満兼公その光景を咲しめし。一色詮秀を召て持朝の云しを延と
りて命せ笑しめひ。持朝を褒賞せんと宜ひたるに。詮秀ハ持朝の一人
功とならんを嫉て嘲笑て云すこし。黄口児の持朝いかで彼処にて妖怪
と問答をするに至らん。思ふに甲夜に魔言して参けるが。事なくて前言
の面目なさに空言をも計られぞ。翁に遭しが説定るべし。狐狸の類の
化て騙したるにてありし。斯は妖怪の出るを制するを許ねば足霊なき
庸佛なり。そのではいかで我身ほか悪霊をよく結るとのあらん。
さる妖魔の地ハ毎く破却して除ざれば。後いかなる祟をなさんも知る
べからずと。おもく申しければ。持朝その讒をきゝて咲て悪み堪がたく。既に
討果さんとまでおもひしが。君の御前を憚りて怒を押へ心を静に熟くおもへば。
翁の云ける佞臣とハこの詮秀なるべしやらん。前言空しからじと。

深く感じかくて観音堂全くこゝなのふざめれども堂亡びぬ。東国乱
とんとありしこの沐猴く刀の及んわざを止めてこんどやと。詮秀ふ對へ。
糸若輩なるとりて。やとと処と疑ひ彼是と緋縅ふ頼ることを易かゝ孫。
我も武士なり。孫ふ君の仇側ふ付りて。添ふ鴻恩ふ報ふ。いざ膝病
赤痢をる」虚言とりて君と欺きちまん。佐々女が谷の記音堂先祖
基氏公の安置せさーのふなると。漫りふ破却せんと。臣ふるの道ふ我
若輩と笑へんより。不知の誤と改め再び記音堂のことを云べゝぶと道理
ぶたーてやけれ。詮秀これと笑へより。顔色朱く成青くなり。大ふ怒り声と
励して云へりけゝ。足下年軽の身と。頭くゝる某ふ對ひ。云ふの一言奇怪
なり。我言と笑て怒ふ堪ぶ。武士のなふひ。生場を去ふぶ。奈何とも做を
ぶたと力とりて叶ぶと想へぶこそ。さるぶの言と速く我が戒辱しなる。

嗟臆病赤痢の白痴なるとめゝまで罵り嘲ぶ。血氣のお胡いぶ怒氣
と忍ぶぶき。彩色朱を灌ぎ注るゞぶゝ変じ。忿然として声と励し。膝病
赤痢の白痴とふ。無礼の過言免さじと。刀の柄ふ手ぶかゝるぶ。詮秀も
膝ふて立し。刀の鞘天ざゐふ。既ふ事ふ及んとそその財ぶ側ふ候ひる
人ゝ。慌忙急ゐ二人を居間。こゝ御前なり尾義なせそと。制するふ満兼
なも然ともに二人ぶ勧解なふゐぞ。互ふ仇ふ解ざれと。君の命せの重
けれ。滅ひ亡ふ人へ。辭ゝしてまうぞり。且説詮秀ふ若輩の お胡
ふ辱ぶられけること。ふゝ悪ふ。彼ぶ云ふふして記音堂をそのまゝに
置ぶ我怪威哀んとこれより変ゝと巧言ふして。記音堂と破却せん
ことと君ふ勧めり。満兼公ふ年若くはまもせず。詮秀が言ふ惑ひ。
終ふ記音堂を毀しぬんとも。抜事家扶安房を憲定ぶ召しゝ。

前夜ちうぐのことありしと。絵秀怪異を做折ふ。光物四方の法師梅代こ
けるふより。其生る処代紀さんゐる結城村朝と依く女ゝ谷ゐ堂ゝ〜ゐちふゐ。
怪しき霊ゐ逢。ちうぐの事云ゆへけること。且絵秀持朝手ひのこと細ゆ
丹命せゝ〜ゐひかゝゐ妖魔の佛堂。そのまゝ置人ハ我武威のなれよ仰られば。
さゐゝ〜破却して。ゆ妖と除く邑と。命ゐひられハ憲定逗ひてゆけれそ。
君ハ紀ゐゝ〜ゐさびゆ。佐く女ゝ谷の紀ゐる堂ハ當初祖父君基氏ゐ鎌倉安
全ゐ祈の為。茂沢蓮行ちの渡私上人して。仇敵の怨霊と結ゐ封じゆ紀
ゐ堂ゐり。さる縁故ゐると。ちうぐゐゐ毀ちゐゐんと。然ゐるゐもゐるぞ。熟〜思
ふ代ゐ人ゐ。紀ゐる命と第ゐも。畢竟絵秀ゐよりなて怪異をなせ〜より発
ゐて。其ゐ身ゐ近習の臣人と。いゐそ足非と弁へざる。既ゐ怪力乱神と語〜ぞ。
とゐふ教もあり。嗟ゐ紀ゐね。一色ゐふるゐひゐゐと。嘆息ゐれハ満兼ゐ扨事

ゐ諫。さゐゐとゐゐゐ。此事既ゐ世ゐゐ公ゐなれり。さる代そのまゝに捨置ハ。
八州の人ゝ。我不武と謂ゐ。命と用ひざゐゐ至ゐ。いゐゐ為頼の任ゐる
ゐ紀ゐ。我詮秀ゐ言と聴て。祖父君の建立ゐひゐ。佛堂と。いゐそ毀んや。
たゐ為頼の職代失ゐゐと想ふゐ故なり。尚足ゐても執ゐ止るや
否と宜ゐとゐゐ。憲定君絵秀ゐ言と信じゐんハ。旅止ゐゐゐゐゐと察し。
此回の事ハさゝゐなれハ。世の害ゐハゐゐまじと。絵ゐ其命ゐ従ひ
ゐば。満兼ゐ去ゐひゐ。彼佛堂と毀んちゐ行ハ。誰ゐゐかんと。常陸
ちゐゐゐ。小栗孫五郎満重。名武常陸介篤光こそ。然ゐるゐゐんとゐ。
さゐゐゐ召ちゐゐ。両人と召されゐる。小栗孫五郎満重と。ゆへゐゐハ常陸國
の住人ゐて其遠祖ハ葛糸親王四代の孫。常陸大掾国香の子。小栗次郎
より八代の孫ゐ国重。左遷の國小栗村ゐ住ゐり。代く源家ゐ勲功あり。

孰中満重が父重躬。足利尊氏に属して功ありしが。多くは庄園に侵
濫り。遠倉の家に基氏公の旗下に属さしむる夫より今の満重驀裘
を嗣て。管領に仕ゆること他事なし。又名武常陸介篤光と云へるハ。是も
常陸國の住人にて。清和源氏の嫡流。新羅三郎義光の後裔なり。此二人
相ともに心質直。萬賢きものなり。されば同氣相求むとて。伺候の侍妻
かる中にも。小栗と。名武とハいと親しく交ゝひ。今日も名武篤光。小栗
満重が所へとふまり。多くは物語してあり。名武ふ。君より俄の御召有りふ。
こハ何事ぞやんと不審ッ。二人うち連管領の所へ来り」ふ。法前ふ召
出され。君自ら宣ふハ。此頃佐々女が谷の観音堂ふ妖怪住よ。父に也
及ばれけるまゝ。汝ホ二人彼所ふ立越て。堂と破却し。妖物を駆拂ふべし
と。命含めふ。名武篤光ハ年四十ふ近くれど。一子なくして嘆く。佐々女が

谷の観音ふ祈誓ふ。子を授ゝ給へ。と願ふ折なれば。大きふ驚く中ゝ。
彼の堂ハ基氏公の建立ふて。霊験ゝふ著しく。小臣も平日ふ奉仕り
けれど。嘗て妖怪とゝもし。聞も及ばず。こハ流言の虚言とも人ハいはじ
堂ふみだりふ毀ちのらん事いかゝふ。父え上ふれハ。満兼公ハ氣色
換し。我慢ふ流言を信じ故ある堂と毀んや。深き所存あつて。汝ホ命じ
破却させんとて。然ら紙汝我命と乗れ。汝若年なれと漫りての故ふ。
よく今ハ汝を用ゐまじ。外ふ人と撰んで破却さるべしと。怒然として宣と
ふ。篤光大きふ恐れ。君の仰既ふ変せり。吾他人ふ命換ゝれば口惜しき事ふ
且ハ観音の祟ふ係失ひ。いと畏ゝも冥加ふ。と心の裡ふ念じ命ふ
逆ひ罪ふて。只顧前の命と乞しゝ。満兼公やゝふ聴て。しばし
その乞ふまゝしふ。且説二人を管領満兼公の命と蒙り。即日人夫を催し

栗名武
佛堂を
毀ち
神霊を
走らす
名武義光
小栗滿重

伝へ聞く谷ふ思ひ入れ。名武篤光が素よりこの観世音を信じ給へば。蚤ふ小栗満重に云ひ。おのれ彫る像とりまゐり。其後堂ふ破却とられ廻ふ堂の下に方一丈ばかりなる平めの大石あり。二人迫り。人夫ども土ふ拂ひ

やーとりふ。十六の真字と彫りけるみ。

法室寓居　惟四十年　常陽二子　應鈍仏縁

といふ文字なり。名武篤光これを着て。大ふ驚き。小栗に對ひ。この堂と當初渡船上人。新田義真の霊ふ鎮ぜーしと伝へふ。此文字ある人。上人既ふ今日のことを知り。かゝる書はけるゆゑん。義真の討死ハ延文四年なり。これより今應永六年まで。指を屈て数へるふ。正ーく四十年なり。常陽二子とハ。足下も聞ん。こゝも陸の住人なれば。二人がことをや。應鈍仏縁ーとハ。いかなることぞ。其仏解ーがたしとあり給へふ。小栗も実用なるん。

ふれふよんで是を思へば。此石の下ふこそ。我真等の霊を封ぜーし處なるぞー。既ふ佛堂を破却ーしたれば。是則佛縁を断ぞるの語ふあるなりと云ふ。名武大ふさとり。四十年前。今日我ー此の堂を破却とると知りまふ。渡船上人の神通感ぞるふ堪きたり。かゝて此石ふ除去こそよけれと。人夫と励ましー。彼石を扛去ふ。ちらりふ。其庭ふ一箇の穴あり。深さ幾尋ありと知りがたし。こハいかゝと篤光満重の二人。立寄ーて。穴の縁を訪き窺ふ。怪むべし。穴庭刮刺と響とゝ。一道の黒氣漆起。半天ふのぼりしが。忽ち空中ふて散ー。十一の金光四方ふ花去失ふなり。是則新田義真とぞ。十人の従士ハ霊今日出世ーて。英雄小栗助重君ほとなり。美名を顕ぞきぬ。北とハ。后ふぞ思ひ知ーるなり。満重も篤光もかゝれ不思議と目前ふ着。奇異の思ひ心酔ーがごとく。歩付ふ居たりしが。ゆゑ果ぞきあるねい。

人夫ふ不知し。破却ちる堂の材木とゞ。積て終に一片の煙とし。すゝ十六字成
彫し石板と車ふ牽し。宮領のに所ふ来り。首尾の光景と詳ふ伝へ上ゝ。
石板と君の御前ふ使くしふ。満兼公これと見焼し。その物語ハ伝メしめ給ふ。
実人由ある佛堂を破却さしたることの詮なし。悔おぼせども既に事果
ぬれば。怎ともせがゝ。小栗。名武の労と賞しまひられ。斯て后左兵衛佐
殿ハ。なほ例ふ倣ひと。ひきとりもてなしを。浮近習の外を遠ざけ対面もせし。
其うちも一色詮秀。只顔に恥ハ蛮法をやるゞ。折ゝ人を退け。
維あるて生事と知るりの色。志うふ。年の十月。紅紫の大内左京
權大夫義弘逆心ハ。泉州境ふ楯籠る。土岐宮内少輔詮直。義弘ふ
一味し。笑徳国長森の城ふたて籠ハ京都ハ軍ハメこ石及ぶ。早く
征伐せどんハ。ゆし。ハ大内と及人と自ら八幡山ふ出陣ましゝ。夫ゝふ兵ハ

分ちて伐しまふふ。幾程もなく。義弘も詮直も亡び失ふ。京ハ大内義弘
将軍家と怨みをなることありて。鎌倉殿と絶ゝ。
せ一首尾ハ一色詮秀の謀とより生しとぞ。左兵衛佐満兼公と同年
十月。一万餘騎と卒しまひ。鎌倉と打立ふ。外ふ。京都ハ軍家の加勢と
被露しはれど。生実ハ。ハ岐詮直ハ長森の城と後詰して。寄ゝと退散し。
其勢ひよ乗じ。往と京都ふ責登り。ハ軍ハ討なり。天下ハ傾んとの支度
なりしが。大内義弘も。土岐詮直も亡び失よけとゆメえしゝ。左兵衛佐殿ハ
本意なゝて。鎌倉ハ罷りまゝ。武州の府中ふ逗留しまひられこの事
誰いふとなゝ。佐兵衛佐殿に謀反のよ。只就て風声ゆメへしゝ。鎌倉の
執事。家扶憲直これハ愁ひ。内し密なりしふ。左兵衛佐殿も夢の醒ゝる
ごとく。後悔ましまふと大ゝ驚ゝ。京都ハ軍家ふてハ鎌倉殿逆心

あるよし。ゑこーに石及ぶれり。源義京都に反くことあらば。ゑこーに天下の大ゆめ。
穏便の源こそ肝要なれと。多く評議あるそ。打軍家より。義京へ教書下し。
野州足利庄と賜りしうば。満義公案ゆ相違。大ゆ喜び深く将軍家の恩
と感謝。翌年の三月武州府中にて。源義ふ左兵衛佐満義公。
源倉の義頼ゆそ。富貴ともに保ち何不足なれ共。かゝは企ならは
ゆゑそいと怪しくも不思議の事こ。此後同年九月末。奥州の宇都宮氏廣
源反。同き九年の春。奥州擁大膳大夫入道管領の命に叛き。新田
義則源倉と寇を。此時八州のうち。新田の旗鼓乱れ。盗賊蜂起する
多くりしうと。或ハ討死或ハ降参して。源倉と傾るもてはるりしゆ。同じき
十四年の八月九日の夜。義領の住所同禄ゆ及びれば。満義公幸らして
住所に逃出るし。完戸を江入道の館ふ入るひね。かゝれば君と臣じめ。諸臣

世とあやぶみ易ひ心もなりけり。足正しく。結城朝祐朝に示しけり。翁が言義よ
遊しなり。不在活下月説。小栗孫五郎満重ハ今年四十に近ひけど。一子さ
も好く。未頼ゆ想ひに遊水六年の冬北頃より妻ゆ懐妊。
ゆゑね月と好りけるあそ。満重ゆ喜び大ゆとるゆ。安産あしゆ。神ゆ伝
ゆ祈しゆ。甚験ゆや。同七年の夏の末。いと安ゆけく。玉のごゝ男児と産りし
かば。夫婦の喜びたぐひなく。堂中の王椿の花と。愛恋しみ。名を小次郎
とぞ叫よりし。此児成生に随ひ。容貌清らゆ心さゆさ人賢く。父母ゆ孝行
ゆ。ゆよみ物かくとうり。引き馬ゆ跨り。太刀合の業ゆ至るまゝく。年
より侍りて。えければ。父母のこゝろいさゝゆも云つゞ。一門他門の人も賞
潅せざるゆなかりゆ。是佐く女ゆ谷ゆて十一道の光物。四方ゆ散乱せり。
今こゝに甚一ッ生れ生れり。此児后ゆ小栗判官助重と。英名と顕ゆ世

豪傑なり。今年寿永十六年。鎌倉の管領左兵衛佐源朝臣。夏より
ようの病煩ひ給ひ。國家の政ときとしやまひ。只顧醫療とのみ
うど。その験なきのみ色もなくなりぬ。日ふとひて重くせのひろれい関八州
の大名諸侯。何候の輩声なきのみ高くせぞ。さしも鎌倉中打ひと
はりて易れ心もなくしみ。七月廿二日といふに。佐兵衛佐殿終に逝去し
まひぬ。御年四十三。勝光院殿とぞ謚し奉りける。鎌倉
の輩さいふもさらなり。京都の軍家なれども。満義公の逝去をなげ
き。悲しみ嘆くこと。海の内の諸侯なども。其翌年はまた京都より。
土岐右馬之允持益と申使とし。満義公の御弟達。幸王殿とまうして。今年
十二歳なりける。左馬頭の任じ。関東の管領相続あるべき旨。
申教書なり下しまゐらせ。執事家枚安房守憲定とぞ。八州の諸大名

安堵の思ひをなしぬ。ちかぢかと限り色。こゝろおいて執事家枚憲定を。
吉日と撰び。幸王殿をえ援さしはめぐ。京都の軍義持公の御偉の
一字なり。清持氏公と称しまゐり。傅きまゐらせ。いまだ幼稚なる在し。
四方の人々をなれと。賢く忠なる者を。近習ふ仕へさせべしと。
その人と撰ぶ。小栗小次郎今年十一歳なりける。豫て孝子ふかく。
勝れたること。鎌倉中にかくれなかりしが。百生されて小侍臣とぞ
なり。かくてなり小栗の家ぞ福重り。人も羨みぬべきほどに栄へしぬ。喜び
めれば悲しみあり世の常なれば。満重が妻の初産。産初の生
たるぬ。日数孕るふ産ひ苦しみ。毎日ぞ。水穀だに入らず。醫療験なく
終に没命なりにけり。満重どもいとしぬ。小栗一家の人々。きぞ失ひ力なく嘆
花なるの翅と綴り。游魚の鰭と断り。嘆きぬ。呆れもどめ。嘆きさ侍。

源朝田義興の靈
栗か家再生せ
栗判官代助重是也
小栗満重
小栗判官
通佛
石武
一女を授く
悪天姫是也
石武寫光

それが中にも小次郎は。原より孝子のことなれば母の病をかなしう。是を側を去ふに心のかぎり看病せしほど。其甲斐もなく。永く別れをぼければ。天を呼び地を呼びて。悲嘆の涙乾く間もなく。心も乱るるばかりと父の満を憂くして諫め。初七の屍を。荼毗の煙とぼしそて。送葬の営をなすふ。東武の秋雨涙と綴り。累くとして紬よめり。北芒の冬嵐音信添。霜止こと志て慈と仰ぎ白揚の下。芝壌の庭ふ埋そて。青塚一塊の土となるのみにそう。放下一切却説這裡。名武常陸介篤光は。彼く女谷れ紀壽堂を破却せる折ふ。十二道の先物四方ふ散ぜし奇怪を看。冥罰いかふあらんと。仏菩薩ざまどの。その折しもかなして信仰しなりし。李爲の親世音。我ぐまふらしと。せめその事と喜び。我家ふ安垂し。信仏いやましそ祈りうれそ。不思議なるかな。此紀世音。名武の家ふ来りたまふ。妻の侍従なること紀おばえ々彩めぞ。夫婦原来紀世音ふ子ふ祈そ中せしなれば。感喜斜うふ。これうんまさしく。法佛の冥助空しかるべ験なりと。月の法佛紀待ふ。昔先ふ易く其年も暮れる。應永七年は夏の未。玉紀歎くべうそなる。女児を産りうれ。足小栗小次郎ぐ生れそ一月と同じ。結城持朝ふ告し。爲ぐ言ふくふ験めり。爲る先夫婦ハ是や菩薩の授けまふなれば。我子なりとそ踊よそべふと。寵愛さること譬へふ物ぞ。傍ふ美しく。邊ふも照り赫くばかり好れがとそ。照天姫とぞ呼びるせり。生長ふまさぶし。天質の艶色。古の衣通姫。小町うんとも紀やめりうんとおぼゆるふ。才人勝そて。女子は為業しくあらぬなく。まそ紀書読ことなんどぞ。ふくに書書生よりも勝りう。父母ハ是や紀世音の化身ふそやあらんぞふとぞ。よく慈愛涙きふはけても。あられそ

女婿もうるると想へど。鎌倉中ふこれぞとおもふ人もなしよ。近日通衆中あて。
小栗小次郎が才貌のとぐれし所を選めくりしうば。篤光ゐまふとく後はき。
折もあらば小栗満重ゐらそえだやと。妻おもそのよう所をえ知らぬよ。
こよなく喜び。奴ゐもか様で。再想ひとぐりねとあくふ。もんこも其仏めくば。
満重ゐ遣なば。此事云出づべしと。その時ととそ行よろう。所ゐ寛永十八年
の春ゐりしが。名武名る光が前栽ゐ。名花の樹あり。いろも花の所ゐ小栗と
まひき。三春の行楽とゐ。はるが。今年も既よ其ところゐなりしが。招ぐや
と思ふ折ゐつ。小栗がゐとゐ使してゆしゐ。此行遊息ゐその小次郎。
如地悩まくゐ。竜ゐひはるが。なまりゐ心屈ゐぐゐ。鬱散の為ゐ庭
の花一見さーきゐ。ゐ免されゐ蒙ぐ。明日ゐ俱ーゆさんと有ゐ。
篤光ゐまのけゐれ折ゐまぐ。こんよゐ幸とかぎゐくゐとび。郎君乃

ゐいゐ夢だゐも存ぜど。ゐ眼きゐ過ぎることいとも かーと。何ゐ
苦ーくゐん。明日そくゐはゐゐのくと。いと慇懃ゐ回應ゐる。使へ
其ゐ後所ゐ。急ひでゐゐ罷ゐる。

宝暦
歌結

小栗外傳卷之一畢

北邨芳

玉露堂

本屋

本屋

本屋 配達人中甚助者性質甚多遥也

本屋 甚助